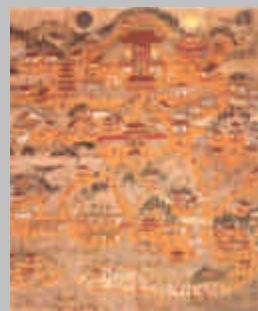


天橋立周辺景観まちづくりの基本理念について

～ 歴史的背景、景観構造の整理 ～

天橋立周辺の歴史的背景

713年の丹後国設置の時、天橋立の北側、現在の宮津市府中地区あたりに国府が置かれた。国の役所や国分寺が建てられ丹後国の中心であった。宮津の中心市街地付近では、1622年京極氏による築城(大手川の東、臨海部に平城が築かれた)以来、丹後の文化や産業の中心となった。岩滝町男山付近から北に通ずる道は鉄道開通(明治14年)までの丹後半島への連絡路であり、野田川の谷には山陰道に通じる重要な通路があった。この2つの要路の出入口にあたる岩滝は、宮津と共に港として栄え、回船問屋が多く、米や絹織物の積出港であった。



成相寺参詣曼荼羅 (桃山時代)



慶応3年(1867)当時の宮津鶴賀城

天橋立を守り育まれてきた歴史的背景

古代の天橋立

丹後国風土記逸文(「日本古典文学大系2 風土記」)に、はじめて「天橋立」の地名が見られ、伊射奈芸命がつくった梯子が海上に倒れて海上に横たわってきたものとされている。神の住み給う場としても「天橋立」は認識されていた。

中世の天橋立

室町幕府三代将軍足利義満は文殊堂に六回にもわたって来訪していることや、明応10年(1501)智恩寺に多宝塔が建立されたことを契機に、雪舟が訪れており天橋立図が制作されるなど、当時の文人墨客により天橋立の景観が称賛された。

近世の天橋立

天正8年(1580)細川氏が丹後に入封した年に智恩寺へ発給した文書において、智恩寺を「無双霊境」と位置づけ、由緒深い寺院であることから寺領を安堵すると述べている。江戸時代中期、天橋立切断の危機に遭遇した際、智恩寺が藩庁へ提出した願書に、天橋立は「天下無双の絶境」との表現がされている。また、天橋立を切断したならば、諸国往来の者にまで嘲弄されることになると述べられている。さらに、天橋立は「二神降下の神跡」であることから、切断することになれば、「天下の聞こえ不吉第一」との記述もみられる。

これらにみられる天橋立に対する考え方は、「丹後国風土記逸文」から連綿として伝えられた、神の住み給う神跡」として尊重され、古来から聖域であるという観念があると思われる。

【崇敬の念をもってみられた場所】

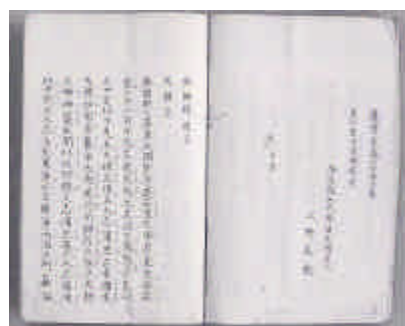
天橋立は「丹後国風土記逸文」以来、連綿として伝えられてきた「神跡」でありまさに「神の住み給う場」であり近世初頭では「無双霊境」、近世中期には、「天下無双の絶境」という表現がもたれるなど崇敬の念が持たれていた。

【文人墨客らによって詠み込まれた姿】

歌枕の地、絵画の対象として

【寺院の境内地として守られた】

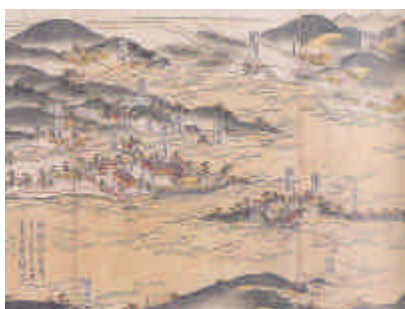
天橋立は、智恩寺の境内地として景観保存に努められてきた。



丹後風土記 慶応2年(1866)



天橋立図 室町時代



丹後国天橋立之図(扶桑名勝図)江戸時代



智恩寺 文殊堂

天橋立を中心とした景観構造(大景域の構造)

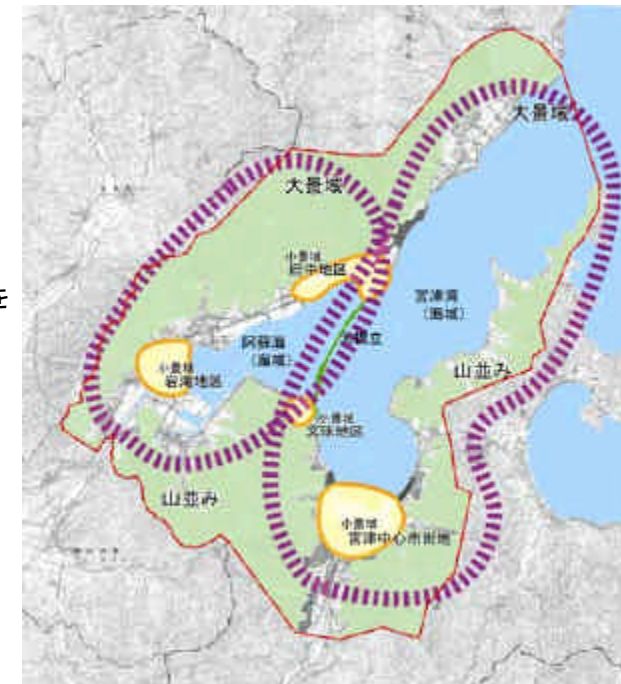
天橋立を中心とした大景域の構造

天橋立周辺の景観構造は、天橋立を境界にして2つの大景域に区分できる。宮津湾の海域とその沿岸域、もう一方は、阿蘇海の海域とその沿岸域である。

一般的に天橋立を視対象として見る眺望や天橋立を視点場として海を挟んで対岸を見る眺望等の関係から、天橋立と海域、沿岸域、山並みを含めた2つの景域が存在し、この景域をつなぐ存在が天橋立となっている。

この景域を構成する天橋立、海域、沿岸域と山並みのバランスが天橋立周辺の特徴的景観をつくっている。

これら大景域を視認できる眺望景(俯瞰景も含む)を望む視点場は、重要な場所といえる。



なぜ、天橋立周辺の景観を守り育てていかなければならないのか?

【様々な観点から】

- 歴史、文化、営みの重層的な蓄積
- 心象風景、地域のアイデンティティ
- 景観と生業、観光振興
- 豊かな自然と環境保全

.....等々

崇拝の地 観光地としての天橋立

天橋立が人々の関心をひいたのは、西国28番札所成相寺が開山した頃(8世紀初頭)と思われる。世屋山中腹(340m)の成相寺は眺望絶景の位置にある。阿蘇海に浮かぶ白砂青松の天橋立などを中心とした自然景観の美が巡礼者の旅の疲れを癒し、自然美を語り伝えたのであろう。雪舟の「天橋立図」や「丹後与謝海天橋立之図」をみると、すでに中世末期(室町時代)に巡礼者の訪れた文珠や府中地区が開けていたことが分かる。林春斎が「日本国事跡考」に「日本三景の一」に加えたのも17世紀中期のことである。

江戸末期頃から庶民の観光が始まり、明治期以降の鉄道や汽船等の発達等により、天橋立への観光が増加する。



天橋立と橋北汽船 昭和9年